

家庭、学校、地域における子どもの居場所

中島喜代子・倉田英理子

The Children's Place in the Home, the School and the Residential Area

Kiyoko NAKAJIMA, Eriko KURATA

1. はじめに

現在、子どもを取り巻く環境は著しく変化している。それは、学歴社会によるゆとりの減少、都市化による自然環境の減少、核家族化・少子化による家庭環境・人間関係の変化など、家庭、学校、地域を含んだ子どもの生活環境すべてにわたっており、時間面においても、空間面においても、人間関係の面においても、子どもが自分に適した居場所を見つけるのが困難な状況を作り出している。さらに、近年においては、携帯電話やインターネットなどの普及により、コミュニケーションの形態の変化も生じている。

一方で、いじめや不登校などの子どもに関する社会問題が広範に現れており、人間関係をうまく構築できないなど様々なストレスを抱えている子どもが非常に多い現状がある。

こうした子どもの心理状態を回復するためには、一人になって自分を取り戻せる場や、気持ちが通じ合える人とのコミュニケーションの場などの子どもの居場所をもつことが非常に重要になると考えられる。

これまで、子どもの居場所に関する研究は、子ども部屋に関するものが中心で、居場所という言葉や概念が使用されるようになったのは、2000年に入ってからである。居場所をタイトルやキーワードに用いている研究は、あまり多くない。小学生を対象にした研究と中高生を対象にした研究がそれぞれ若干みられる。しかし、これらは、住宅の中だけに限定されていたり、居住地域だけ、あるいは特定の社会施設だけに限定されており、子どもの生活全体をとらえたものではない^{1)~6)}。

そこで、本研究では、居場所を、一人になって自分を取りもどすための「個人的居場所」と、人とのコミュニケーションをとるための「社会的居

場所」に分類し、家庭、学校、地域など子どもを取り巻くすべての生活における居場所と子どもの心理状態の実態を捉えることを目的とする。

2. 調査方法と調査対象の概要

研究目的にしたがって、調査は小・中学生よりも行動範囲の広い高校生を調査対象にすることとし、三重県内のA高校の1年生と2年生に対して調査を実施した。その結果191件の有効サンプルを得た。表1に調査の概要を示す。

調査対象は、1年生が約7割、2年生が約3割である。性別は、男子が約4割、女子が約6割である。学年と性別について、表2と表3に示す。

本研究で用いる「居場所」の定義は、藤竹暁、高塚雄介、田中治彦らの定義を踏まえ⁷⁾⁸⁾、「自分の存在が確認できる場所」とする。したがって、「居場所」は単なる空間を意味するものではなく、

表1 調査の概要

	件数
配布数(部)	260
回収数(部)	191
回収率(%)	73.4
無効数(部)	6
有効数(部)	185
有効率(率)	96.8

表2 調査対象の学年

	件数	%
高校1年生	125	67.6
高校2年生	59	31.9
無回答	1	0.5
合計	185	100.0

表3 調査対象の性別

	件数	%
男	75	40.5
女	108	58.4
無回答	2	1.1
合計	185	100.0

心理的な側面を含んだものである。また、「居場所」をその性格から二つに分類し、「一人になって自分を取り戻せる場所」を「個人的居場所」、「人と関わりをもち自分を確認できる場所」を「社会的居場所」と定義する。

「居場所」を調査するにあたって、「個人的居場所」の内容について細分し、①一人になりたいときの居場所、②好きなことに熱中したいときの居場所、③嫌な思いをしたり、ストレスをためた時の居場所、④大人の目を避けたいときの居場所、の4パターンに分けて調査した。

3. 調査結果と考察

1) 子どもの生活と意識

本項では、子どもの居場所のあり方全般に対して、関連が強いと考えられる子どもの生活と、居場所に関わる意識について、検討する。

(1) 子どもの趣味

子どもの趣味のもちかたによっては、居場所の傾向に違いが出てくると考えられる。ここでは、個別具体的な趣味の種類ではなく、趣味の特徴を捉えるため、①趣味行為を行う人的単位の視点から「一人でするものより皆でするものの方が好きだ」、②趣味行為を行う空間の視点から「室内でするものより、外でするものの方が好きだ」、③趣味行為自体の性格の視点から「じっとしているものより、体を動かすものの方が好きだ」の3つの点について調査した。調査結果を、図1に示す。

人的構成については、やや集団志向が強いものの、一人の場合と集団の場合に2分された。行為空間については、室内志向がかなり強い。行為自体の性質としては、静的なもの動動的なものに2分している。このことから、対象全体としては、居場所は室内が多いと考えられるが、「個人的居場所」と「社会的居場所」の双方に関わる趣味がもたれていると考えられる。

(2) 打ち込んでいること

打ち込んでいることの有無と種類によっては、

居場所の傾向に違いが出てくると考えられる。打ち込んでいることを一つ選択する方法で行った調査結果を、図2に示す。

「クラブ活動、委員会活動など」「友達との交流」といった人との関わりを伴うものが多く、「社会的居場所」をもつことにつながっていると考えられる。しかし、「特にない」と答えた生徒も約2割存在しており、居場所をもつことを困難にしている状況も一部みられる。

(3) 休日の過ごし方

自由に行動できる休日の過ごし方は、子どもの居場所の形成に大きな関連があると考えられる。休日の過ごし方を一つ選択する方法で行った調査結果を、図3に示す。

もっとも多いのは、友人との交流で約4割、次に「一人でのんびりする」の3割や「好きなことに熱中する」が続く。人との交流を行うグループと一人で過ごすグループに2分しており、「社会的居場所」と「個人的居場所」の形成にそれぞれ影響を与えていると考えられる。

(4) 間接的なコミュニケーション

携帯電話やパソコンの普及に伴い、メールやインターネットでコミュニケーションする機会が増

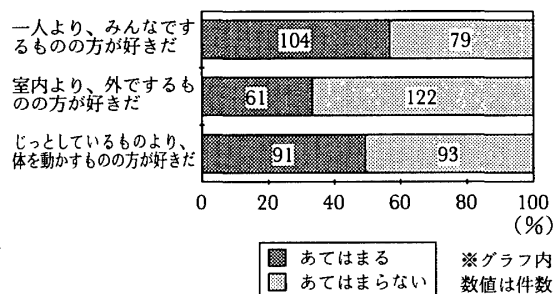


図1 子どもの趣味

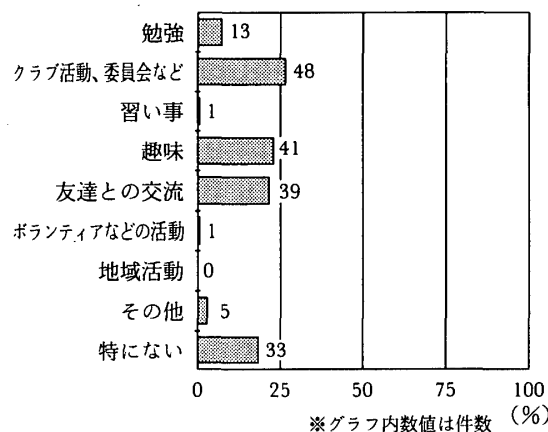


図2 打ち込んでいること

家庭、学校、地域における子どもの居場所

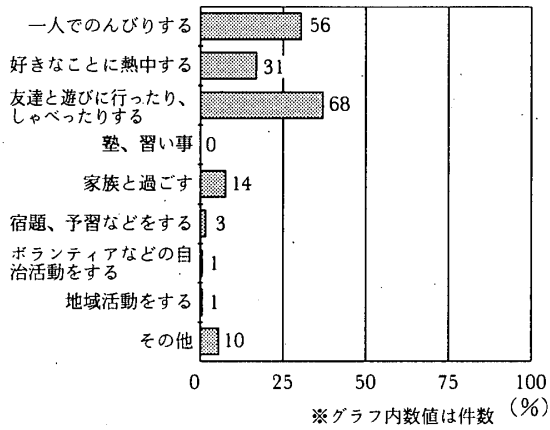


図3 休日の過ごし方

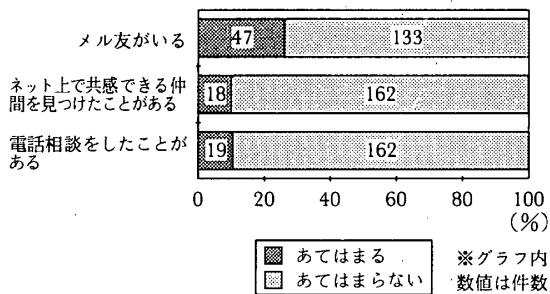


図4 間接的なコミュニケーション

えている。直接対面して会話することが苦手な子どもにとっては、重要なコミュニケーション手段になっていると考えられる。

そこで、直接会ったことのない人とのかかわりについて、「①メル友がいる」、「②ネット上で共感できる仲間を見つけたことがある」、「③電話相談したことがある」の3項目について調査した。その結果を、図4に示す。

メル友が3割、ネットや電話相談は1割程度となっている。全体としては、多い数字ではないが、このような形で居場所を形成している子どもも存在していることが明らかになった。

(5) 居心地のよい場所

子どもは、生活の中のどこに居心地のよさを感じているのかをとらえるため、居心地の良い場所を「家庭」「学校」「家庭・学校以外（地域）」「特にない」の4カテゴリーに分けて調査した。その結果を、図5に示す。

もっとも多かったのは、「家庭」で、6割を占めた。「地域」や「学校」は1割前後となっており、子どもは家庭を中心に居心地の良い場所を見つけているが、地域や学校に求めているものもみられる。また、居心地の良い場所を見つけられな

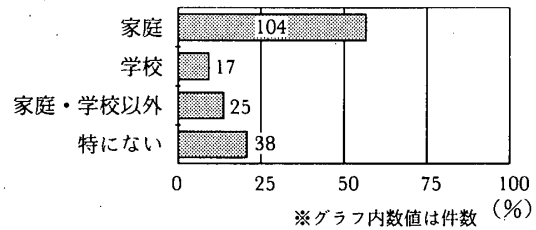


図5 居心地の良い場所

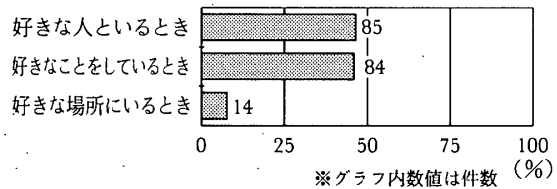


図6 好きな時間

い子どもも2割存在するという問題のあることが明らかになった。

(6) 好きな時間

子どもの居場所形成に関わる要因を探るため、子どもが好きな時間を検討する。子供が好きな時間を、「①人の要因:好きな人といるとき」、「②行為の要因:好きなことをしているとき」、「③空間の要因:好きな場所にいるとき」の3カテゴリーに分けて調査した。その結果を、図6に示す。

子どもが好きな時間は、人の要因と行為の要因に集中しており、同程度であった。空間の要因が占める割合は1割にも満たず、単に場所を提供するだけでは居場所にならないと考えられる。特に、「社会的居場所」形成には、人や行為の要因が重要であるといえよう。したがって、社会的施設を計画する場合、建物そのものより、そこで行う活動やイベントなどが重要であることを示しているといえる。

2) 家庭における子どもの居場所

(1) 家庭における子どもの生活

本項では、家庭において、子どもの居場所形成を左右すると考えられる子どもの生活について、検討する。

i. 家庭における役割分担

家庭で役割分担を行うことは、家族の一員であることを認識し、家庭における自分の存在価値を確認する機能を果たすと考えられる。役割分担の有無について調査した結果を、図7に示す。

家庭で役割分担を行っている子どもは、3割程度であり多くない。したがって、この側面が家庭における居場所を形成することに影響を与えて

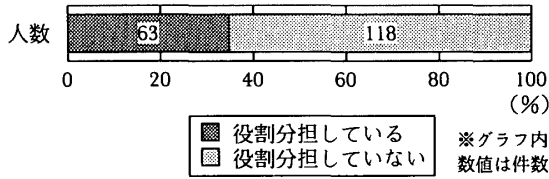


図7 家庭における役割分担

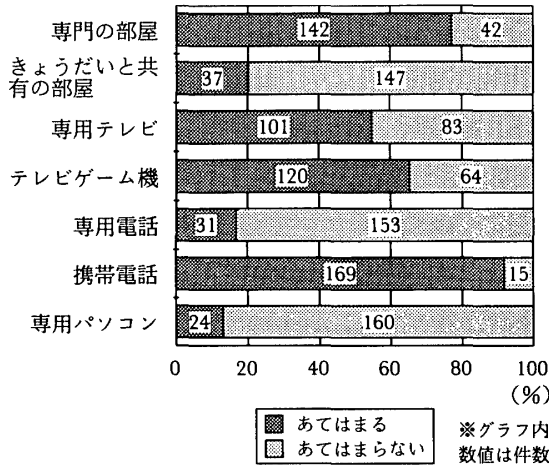


図8 子どもの所有物

いることは少ないと考えられる。

ii. 子どもの所有物

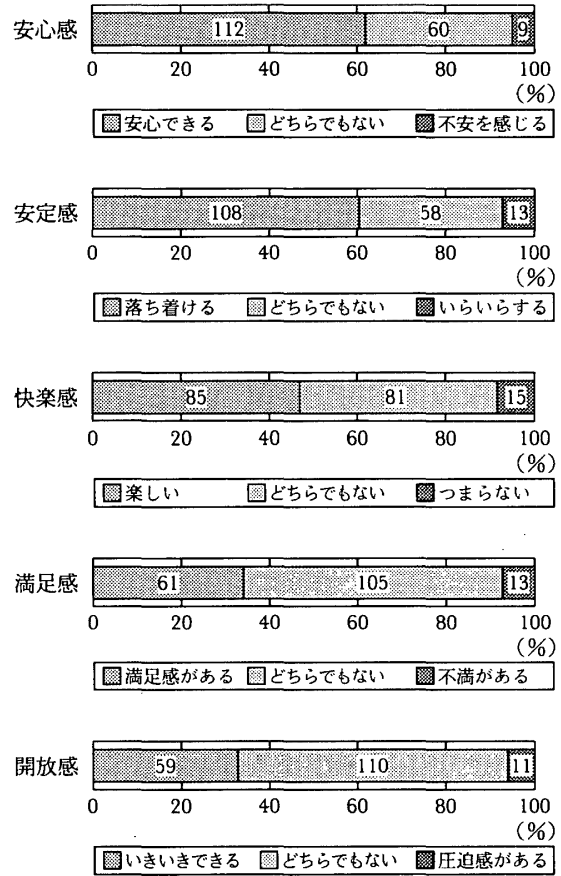
自分専用の個室や持ち物を所有することは、居場所の形成に大きな影響をもつと考えられる。空間やコミュニケーション手段等に関わる7種類の自分専用の所有物について、その所有の有無を検討した。その調査結果を、図8に示す。

自分専用の個室を所有している子どもは約8割あり、ほとんどの子どもは一人になることができる「個人的居場所」の空間条件を備えていると考えられる。自分専用の所有物についてみると、もっとも所有率が高いものは携帯電話で約9割、次にテレビゲーム機が約6割、テレビ約5割と続いている。これは、自分専用の個室で、友達と会話をしたりゲームやテレビを見てストレスを解消できる環境にあることを示しており、「個人的居場所」形成を促進する働きをしていると考えられる。

(2) 家庭における子どもの心理状態

i. 家庭における子どもの心理状態

家庭の居場所としての機能がどのように働いているのかをとらえるため、子どもの心理状態について検討する。心理状態を、「安心感（安心できる－不安を感じる）」「安定感（落ち着ける－いらいらする）」「快楽感（楽しい－つまらない）」「満足感（満足感がある－不満がある）」「開放感（い



※グラフ内数値は件数

図9 家庭における子どもの心理状態

きいきできる－圧迫感がある)」の5つの側面から調査した。その結果を、図9に示す。

家庭における子どもの心理状態をみると、「安心感」や「安定感」を感じるものが約6割と多い。したがって、家庭に「個人的居場所」を形成している子どもが6割存在すると考えられる。しかし、自分専用個室の所有率が8割であったことを考えると、単に空間があるだけでは居場所が形成されるわけではなく、その差の2割には何らかの居場所形成に対する阻害要因が働いているといえる。また、「快楽感」はやや下がって5割、「満足感」と「開放感」はさらに下がって3割となっている。これは、家庭で自分を自由に表現することが困難な状況を示していると考えられ、「人と関わりをもち自分を確認できる場所」と定義した「社会的居場所」の機能は十分発揮されていないといえよう。

ii. 家庭における居心地

家庭における居場所の働きをとらえるため、子どもが感じる居心地について検討する。家庭で居心地が良いと感じるときについて、「家庭団欒をしているとき」「一人でのんびりしているとき」「友

家庭、学校、地域における子どもの居場所

達を部屋に呼んだり、電話やメールをしているとき」「人に邪魔されずに好きなことに熱中しているとき」「特に居心地が良いと感じるときはない」の5カテゴリーから1つ選択する方法で調査した。その結果を図10に示す。

子どもにとってもっとも居心地が良いのは「一人でのんびりしているとき」で4割、次いで「人に邪魔されずに好きなことに熱中しているとき」で2.5割となっているが、これらは「個人的居場所」の内容に関わることである。一方、「社会的居場所」に関わる友達や家族との交流に居心地の良さを感じるものは前者の半数しかない。このことから、家庭は「個人的居場所」の機能は発揮されているが、「社会的居場所」の機能は弱いといえよう。

(3) 家庭における子どもの「個人的居場所」と「社会的居場所」

「個人的居場所」を、「一人になって自分を取り戻せる場所」と定義した意味内容から、Aタ

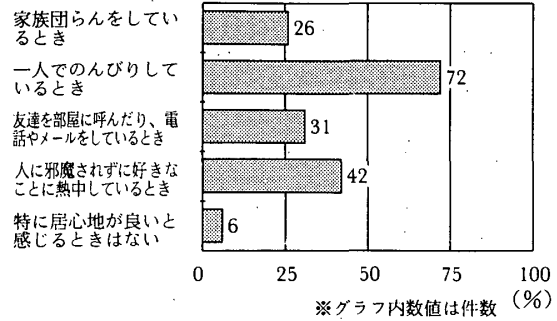
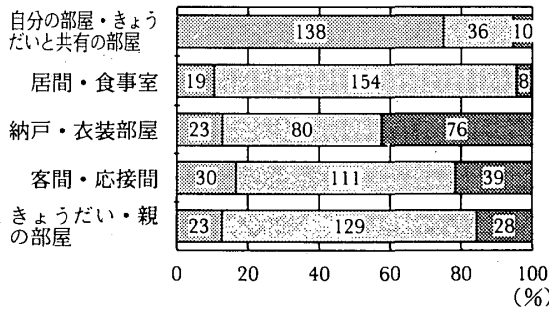
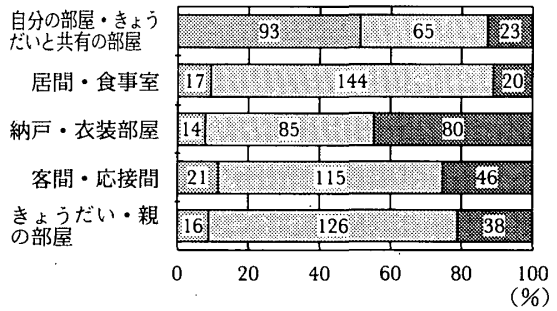


図10 居心地が良いと感じる時

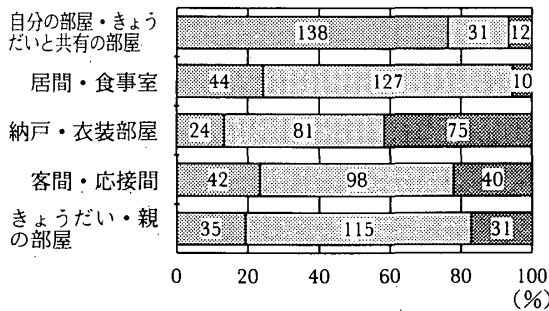
一人になりたい時の居場所 (家庭)



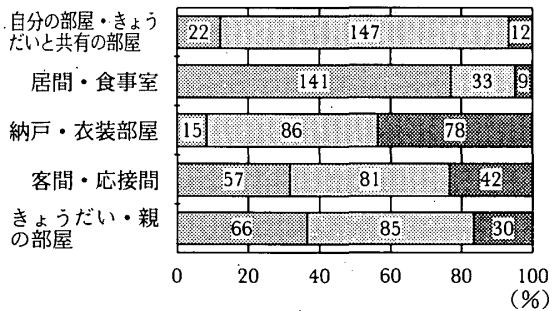
大人の目を避けたい時の居場所 (家庭)



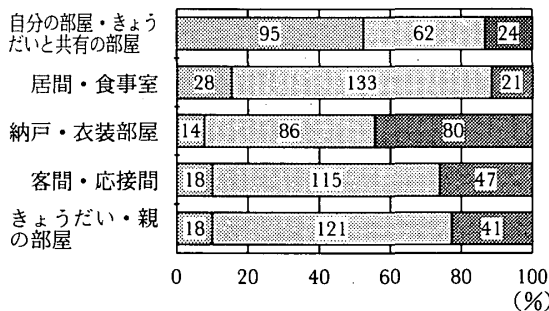
好きなことに熱中したい時の居場所 (家庭)



家族と話をする時に居ることが多い場所 (家庭)



嫌な思いをした時やストレスをためた時の居場所 (家庭)



※グラフ内数値は件数

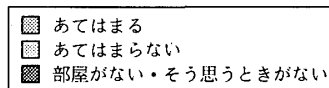


図11 家庭における「個人的居場所」と「社会的居場所」

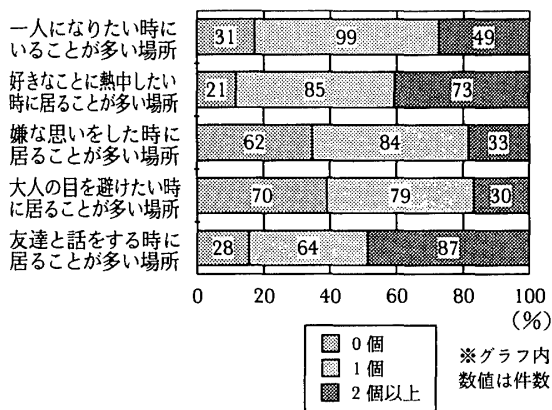


図 12 居場所の個数 (家庭)

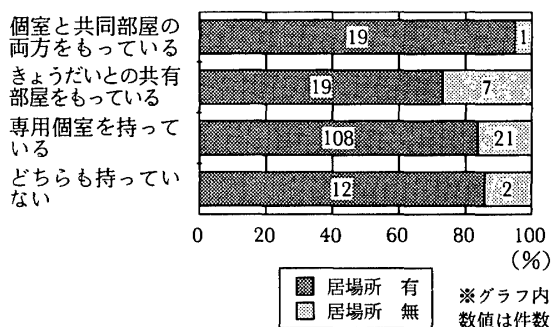


図 13 個室の所有形態と1人になりたい時の居場所の有無

タイプ:他人からの隔離・逃避要求を中心にした「①一人になりたい」「②大人の目を避けたい」という側面と、Bタイプ:隔離・逃避要求に気の合った人との交流要求を含んだ「③好きなことに熱中したい」「④嫌な思いやストレスを発散したい」という側面に分けた。

この「個人的居場所」の4つの場面に「家族と話をする」という「社会的居場所」を加えその使用場所について調査した結果を図 11 に示し、場面別の使用場所数を図 12 に示す。

まず、Aタイプの隔離・逃避要求を中心にした「一人になりたいときの居場所」は約8割の子どもがもっており、比較的居場所の確保は容易であると考えられる。使用場所は、自分の部屋が圧倒的に多く個室中心に使用されており、他の部屋はあまり使われていない。しかし、自分の部屋はあってもこの場面で使用されていないケースが2割程度ある。そこで、個室の所有形態別に一人になりたいときの居場所の有無をみると(図 13 参照)、専用個室をもっている一人になりたいときの居場所がない場合があり、人の出入りなど使用上の問題があると考えられる。

次に、同じAタイプの他人からの隔離・逃避要求を中心にした「大人の目を避けたいときの居場所」は約6割の子どもしかもっていない。使用場所は、自分の部屋がもっとも多いもののすべての空間について前者より減っている。特に、自分の部屋の使用率が半数しかなく、家庭では大人の目を避けることがかなり困難なことを示している。大人の目を避けるということは、前者よりもかなり高次元の隔離・逃避要求であると考えられる。

一方、Bタイプの「好きなことに熱中したいときの居場所」は約9割の子どもがもっており、比較的居場所の確保は容易であると考えられる。使用場所は、自分の部屋を中心として、比較的多様な部屋が使われている。

次に、同じBタイプの「嫌な思いをしたり、ストレスをためたときの居場所」は、6.5割の子どもしかもっていない。使用場所は、自分の部屋がもっとも多いもののすべての部屋について使用率は前者より少ない。特に、自分の部屋の使用率が半数しかなく、自分の部屋においても嫌な思いやストレスを解消することは、かなり困難なことを示している。嫌な思いやストレスを解消することは、前者よりも高次元の隔離・逃避要求であると考えられる。

このように、家庭においてはAタイプ、Bタイプともに、高次元の隔離・逃避要求を満たすには不十分であるといえよう。

3) 学校における子どもの居場所

(1) 学校における子どもの生活

学校における居場所の形成に関連を有すると考えられる、「クラスにおける役割分担」「部活動の参加状態」「部活動における役割分担」「委員会・生徒会活動の参加状態」などの所属や役割分担について、検討する。調査結果を、図 14~17 に示す。

所属については、クラブが8割、委員会・生徒会が3割となっており、クラス以外に所属する場所をもっているものが多い。役割分担をもっているものは、クラスで4割、クラブでも4割程度あり、「社会的居場所」を形成するきっかけをもっているものは、多いといえよう。

(2) 学校における子どもの心理状態

i. 学校における子どもの心理状態

家庭の場合と同様に、学校における子どもの心理状態について検討する。調査結果を、図 18 に

家庭、学校、地域における子どもの居場所

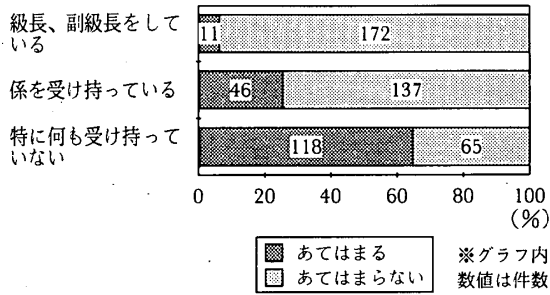


図14 学校における役割分担

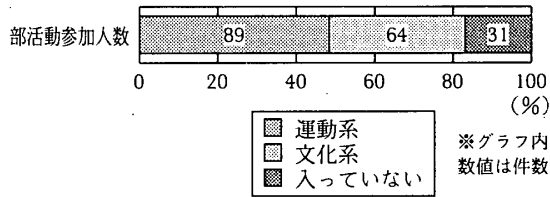


図15 部活動の参加

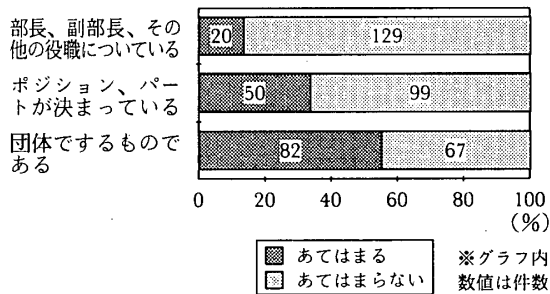


図16 部活動における役割分担

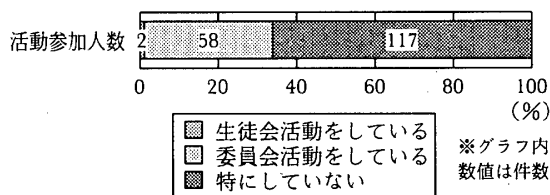


図17 生徒会、委員会活動の参加

示す。

学校において、「安心感」や「安定感」を感じている子どもは、1~2割とかなり低く、学校においては、「個人的居場所」を形成することは、非常に困難であることがとらえられた。また、すべての点について、マイナスの心理状態にあるものが、家庭の場合と比べてかなり多い状況である。しかし、「快感感」を感じているものは、約5割と比較的多く、友達との交流を通じた「社会的居場所」が形成されていることが明らかになった。

ii. 学校における居心地

家庭の場合と同様に、学校における子どもの居

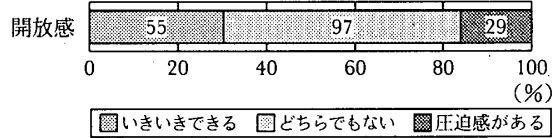
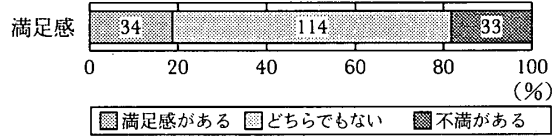
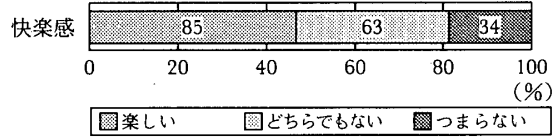
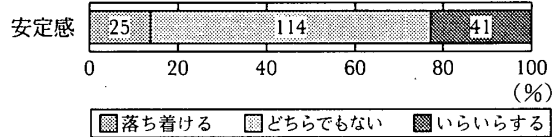
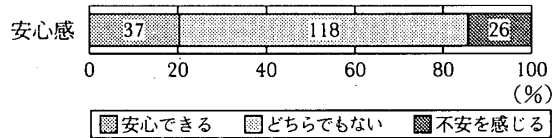


図18 学校における子どもの心理状態

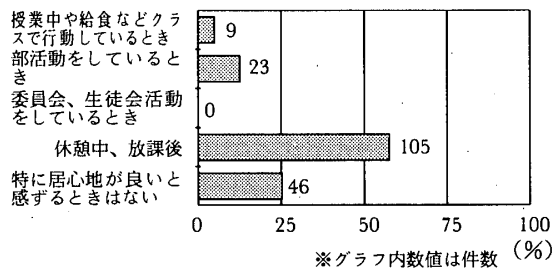


図19 学校で居心地の良いと感じる時

心地について検討する。図19に示す5つのカテゴリーの中から一つを選択する方法で調査した結果を、同図に示す。

もっとも居心地が良いと感じているのは、「休憩中・放課後」で6割、次いで「部活動」の2割であり、拘束のない自由な時間に居心地の良さを感じている。一方、クラス活動や委員会活動などの拘束された時間に居心地の良さを感じているものはほとんどない。また、「居心地が良いと感じるときはない」と答えているものが3割近く存在しており、学校において、「居場所」を形成できていないものが多いといえる。

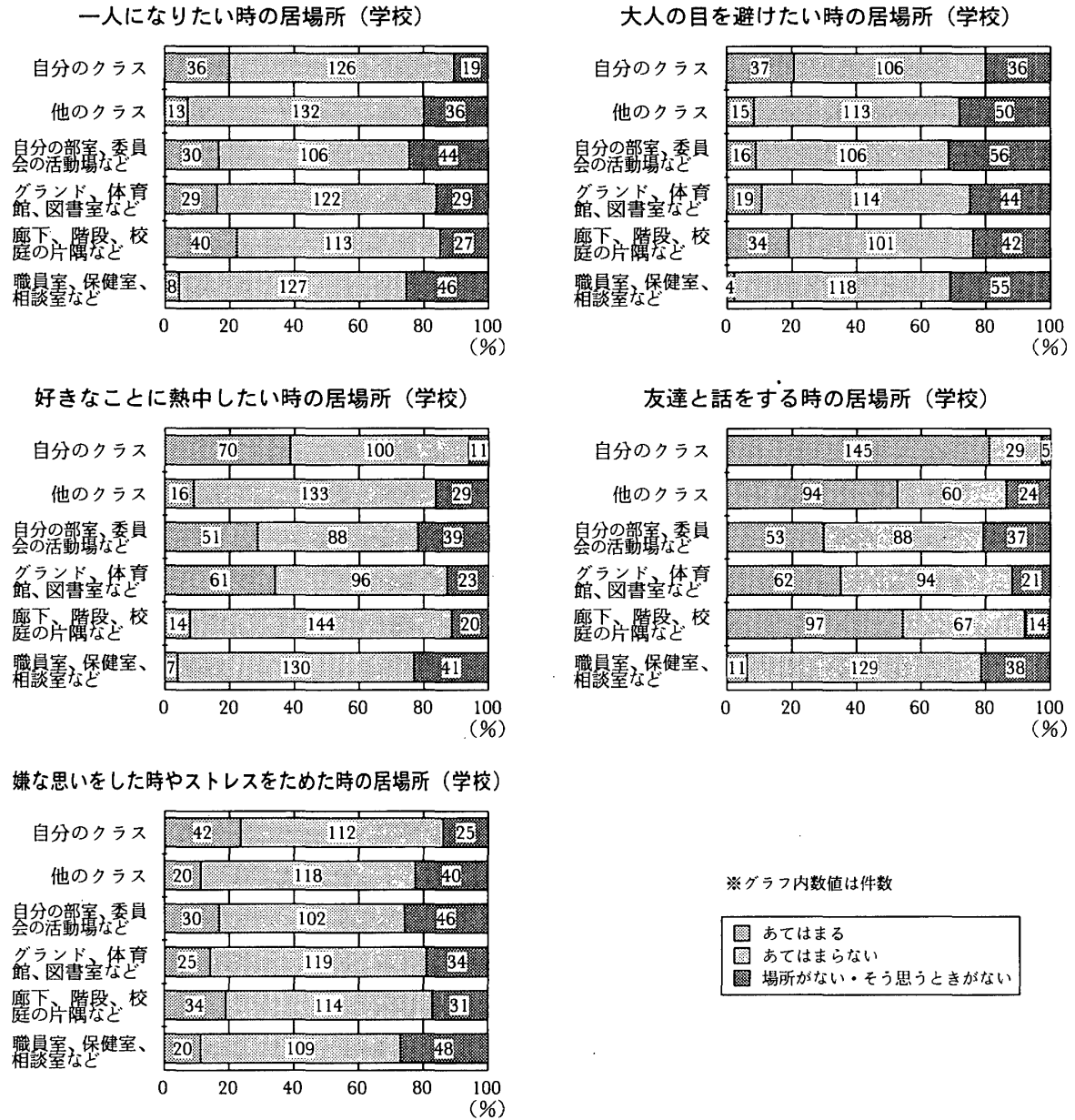


図 20 学校における「個人的居場所」と「社会的居場所」

(3) 学校における「個人的居場所」と「社会的居場所」

家庭の場合と同様に、学校における「個人的居場所」をその内容から4種類に分け、「社会的居場所」である「友達と話をするときの居場所」を加えて、その場面別に使用する場所を調査した。その結果を図20に示す。また、場面別の使用場所数を、図21に示す。

まず、学校において、Aタイプの「一人になりたいときの居場所」をもっているものは、5割であり比較的多いが、家庭の場合よりも低く、学校で隔離・逃避要求を実現するのは、困難であることがとらえられた。使用場所は、「廊下・階段・

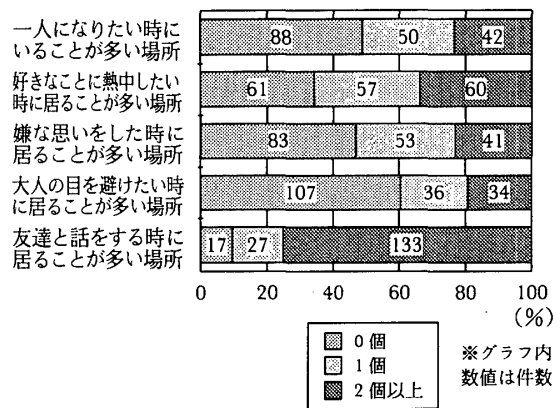


図 21 人間的居場所の個数 (学校)

家庭、学校、地域における子どもの居場所

校庭の片隅」、「自分のクラス」「自分の部室」などが2割程度で続いている。これらは、隔離性のある場所や自分のテリトリー性がある場所である。

次に、同じAタイプの「大人の目を避けたいときの居場所」をもっているものは、約4割とさらに前者よりも少なくなっている。使用場所は、「廊下・階段・校庭の片隅」と「自分のクラス」が多く、前者と同様に隔離性やテリトリー性のある場所が使用されている。

一方、Bタイプの「好きなことに熱中するときの居場所」をもっているものは、6.5割と比較的多い。使用場所は、熱中する行為によって、クラスや部室、グラウンドなどが使われている。

同じBタイプの「嫌な思いをしたり、ストレ

スをためたときの居場所」をもっているものは、5割程度で前者より少なくなっている。使用場所は、「自分のクラス」や「廊下・階段・校庭の片隅」などのテリトリー性や隔離性のある場所が使われている。

また、「社会的居場所」としての「友達と話すときの居場所」をもっているものは、9割に上り、「社会的居場所」はほとんどのものが持っているといえる。使用場所は、多様な場所が使われている。

全体を通してみると、どの場面についても家庭より「個人的居場所」を形成することが困難な状況が捉えられる。しかし、友達との交流を通じた「社会的居場所」になっていることが明らかになった。また、家庭の場合と同様に、A、Bタイプともに高次元の隔離機能を要求する場合には、「居場所」の形成はさらに困難になることがとらえられた。

4) 地域における子どもの居場所

(1) 地域における子どもの生活

子どもが居住する地域における子どもの居場所形成に関連があると考えられる、「居住年数」「地域の人間関係」「地域の自然環境」について検討する。その調査結果を、図22～24に示す。

7割の子どもが生まれたときから現在の居住地にすんでおり、居住地には仲の良い友達が8割、親同士が仲の良い家が6割あるなど、地域に密着した生活をしているといえる。また、居住地に、田や畑があるものが8割、川の土手や雑木林があるものが6割あるなど、自然環境に恵まれているといえる。

(2) 地域における子どもの心理状態

i. 地域における子どもの心理状態

家庭、学校の場合と同様に、居住地における子どもの心理状態について検討する。調査結果を、図25に示す。

居住地において、「安心感」や「安定感」を感じている子どもは、4～5割となっており、学校の場合よりかなり高い。居住地に「個人的居場所」を形成しているものが多いと考えられ、家庭における「個人的居場所」の補完をしているといえよう。

ii. 地域における居心地

家庭、学校の場合と同様に、居住地における居心地について検討する。図26に示す10のカテ

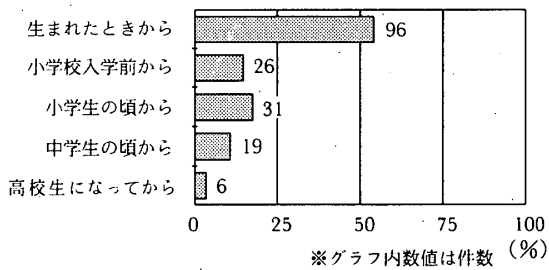


図22 子どもの居住年数

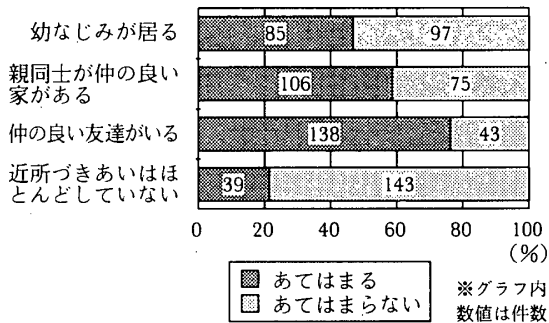


図23 地域の人間関係

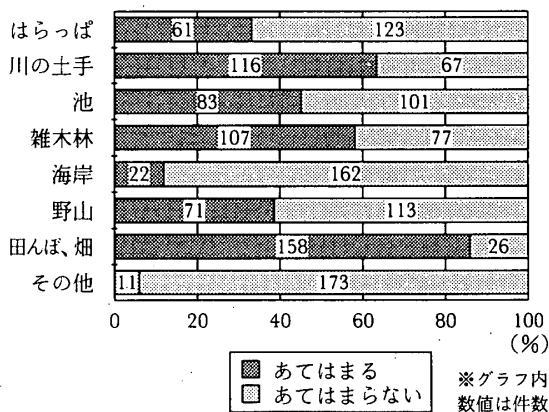


図24 地域の自然環境

グリーンの中から一つ選択する方法で調査した結果を、同図に示す。

居住地域で、もっとも居心地の良い場所は、「友達の家」が3割、「たまり場で仲間と集まっているとき」が2割、次いで「よく行く店」となっている。居心地の良い場所は、友達や仲間がいる場所が多く、人と一緒にいるときに居心地の良さ

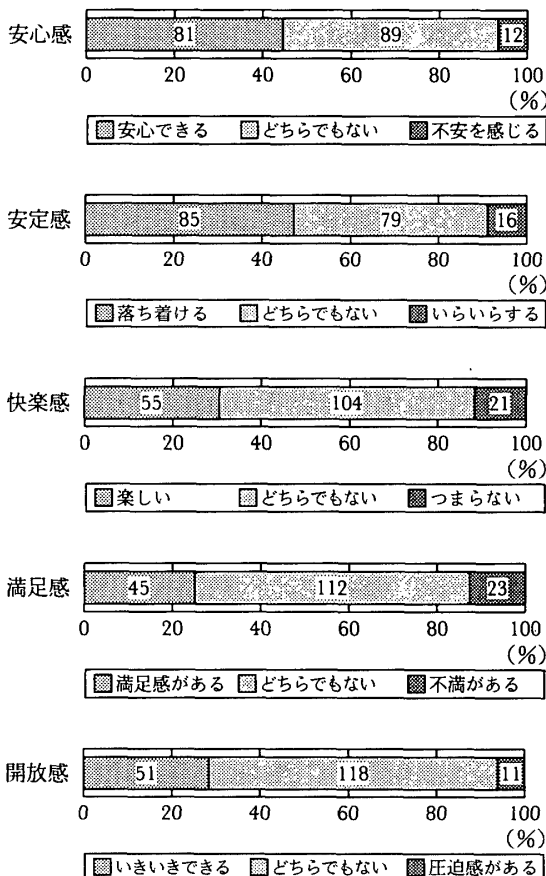


図25 地域における子どもの心理状態

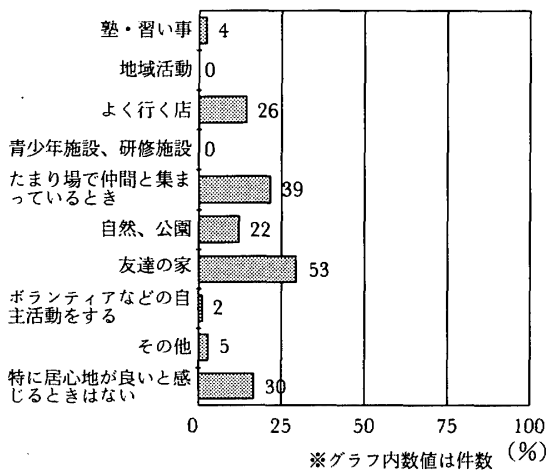


図26 地域で居心地が良いと感じるとき

を感じているといえる。また、「特に居心地が良いと感じるときはない」と感じているものは2割弱存在するが、学校の場合よりも少なく、この面からも居住地域が、家庭における居場所の欠落部分を補完しているといえよう。

(3) 地域における子どもの「個人的居場所」と「社会的居場所」

家庭や学校の場合と同様に、居住地域における「個人的居場所」について、その意味内容から4種類に分け、「社会的居場所」を示す「友達と話をするときの居場所」を加えて、その場面別使用する場所について検討する。その調査結果を、図27に示す。また、場面別に使用する場所数を、図28に示す。

まず、居住地域において、Aタイプの「一人になりたいときの居場所」をもっているものは5.5割となっており、学校の場合と同程度である。使用場所は、「公園・川の土手」と「よく行く店」が多く使われており、それらは隔離性と匿名性のある場所であり屋外と屋内の両方が居場所となっている。

次に、同じAタイプの「大人の目を避けたいときの居場所」をもっているものは、前者よりもやや低く5割となっている。しかし、この割合は学校の場合よりも高く、家庭における居場所の欠落部分を補完していると考えられる。使用場所は、「友達の家」が最も多く約4割、次いで「公園・川の土手など」「よく行くお店」が2割程度で続いている。これらは、隔離性のある場所や匿名性のある場所である。

一方、居住地域においてBタイプの「好きなことに熱中したいときの居場所」をもっているものは6割でやや多く、学校の場合と同程度である。使用場所は、もっとも多いのは「よく行くお店」で4割、「友達の家」の3割と続いており、室内が居場所になる傾向がある。

同じBタイプの「嫌な思いをしたりストレスをためたときの居場所」を持っているものは約5割で、前者より少なくなっている。使用場所は、「公園・川の土手など」「友達の家」「よく行くお店」が2割前後で使われている。このことから、ストレスの解消には一人になるタイプと友達とともに解消するタイプが存在することが明らかになった。

また、「社会的居場所」としての「友達と話をするときの居場所」を持っているものは、9割に

家庭、学校、地域における子どもの居場所

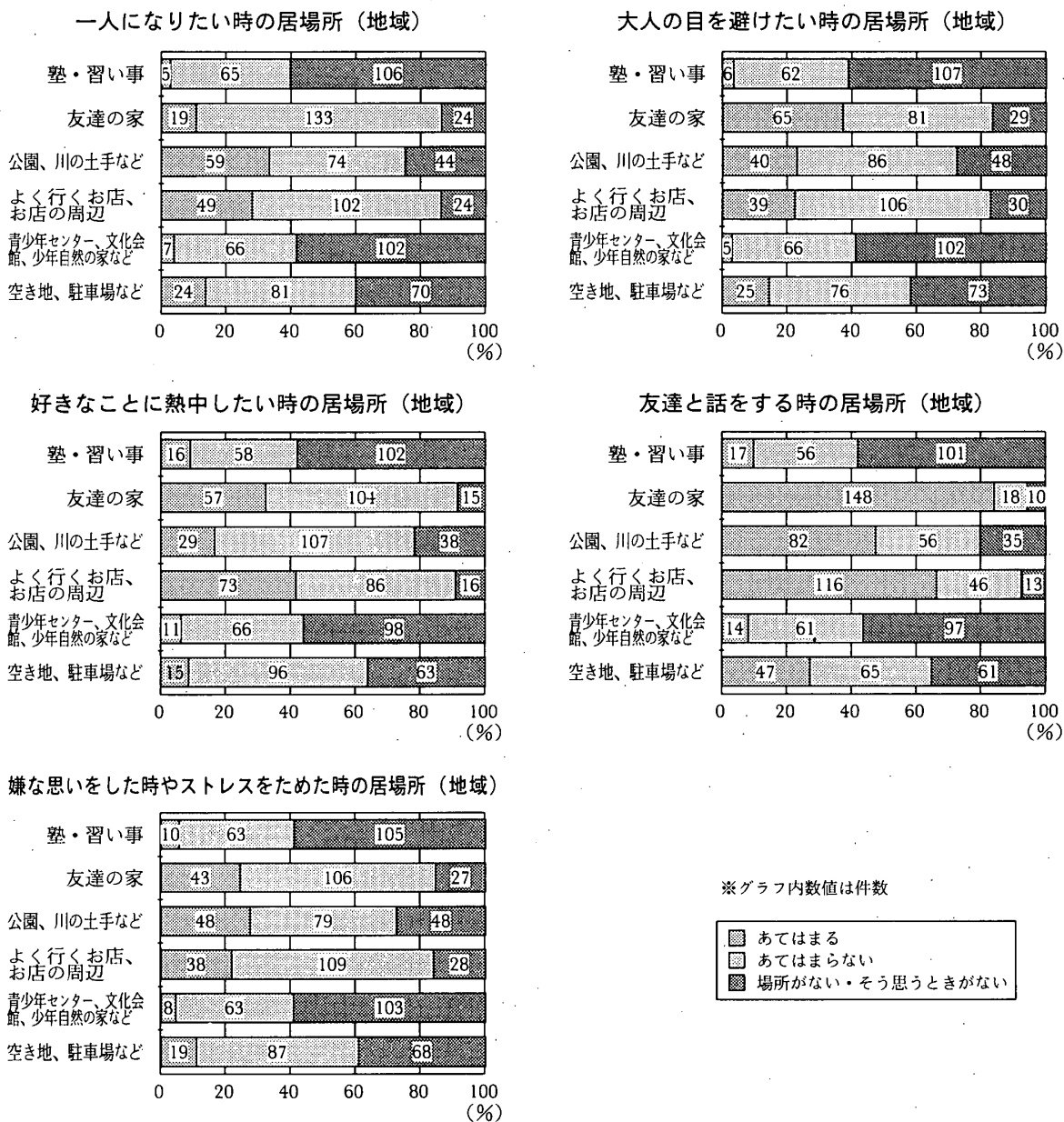


図 27 地域における「個人的居場所」と「社会的居場所」

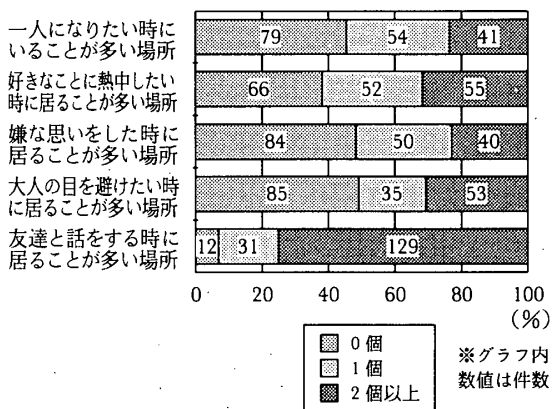


図 28 居場所の個数 (地域)

のぼり、非常に多くなっており、学校とともに居住地域にも「社会的居場所」をほとんどの子どもが持っていることが明らかになった。使用場所は、「友達の家」がもっとも多く8割、次に「よく行くお店」が6割、「公園・川の土手など」が5割と続いている。友達の家を中心であるが、その他の屋内や屋外も使われている。

以上より、居住地域は、「個人的居場所」「社会的居場所」の両側面で、家庭の居場所で欠落する部分、すなわち「個人的居場所」における高次元の隔離・逃避要求を補完し、さらに「社会的居場所」機能の補完もしているといえる。また、家庭や学校でもみられた高次元の隔離・逃避要求の場

合にはそれに対する居場所は形成されにくいという傾向は同様である。

4. おわりに

現在の子どもは、「居場所」を形成するのが困難な生活環境にあると考えられるが、また同時にストレスを抱えている子どもが多く、心理状態はあまり良好であるとはいえない。そのような状況において、子どもの居場所の実態を心理状態とともにとらえることは、大きな意味があると考えられる。本研究では、「居場所」を単なる空間の側面だけでなく心理的な側面を含んだものとして捉えている。また、「居場所」を「個人的居場所」と「社会的居場所」に分け、さらに「個人的居場所」をその意味内容と要求の次元から4種類のタイプに分けて「居場所」の実態を探ることを目的とした。この目的を達成するため、高校生を対象に調査を実施した。その結果、以下の知見を得た。

1) 子どもの生活と意識

子どもの趣味や打ち込んでいること、休日の過ごし方からみると、子どもは個人的な行為と集団的な行為を行っており、「個人的な居場所」と「社会的な居場所」を形成することにつながる要素も持っていると考えられる。

子どもは、家庭を中心に居心地の良い場所を見つけているが、どこにも見つけられない子どもが2割存在することが明らかになった。また、好きな時間の側面からみると、人の要因や行為の要因が重要であり、単に空間を与えられるだけでは子どもの居場所にならないことも明らかになった。

2) 家庭における子どもの居場所

「個人的居場所」の空間的基盤になる「専用の子ども部屋」を8割の子どもが所有し、「共有の子ども部屋」を含めるとほとんどの子どもが子ども部屋を所有している。また、携帯電話やテレビなどの所有率も高く、「個人的居場所」を形成するための物理的環境は整っているといえる。

家庭に「安心感」や「安定感」を感じている子どもは多く、家庭に「個人的居場所」を形成している状況はとらえられたが、「満足感」や「開放感」を感じている子どもは少なく「社会的居場所」の機能は不十分であること、さらに子ども部屋があるだけでは「居場所」にならないことも明らかになった。居心地の面からも、家庭は「個人的居場所」の機能は発揮されているが「社

会的居場所」の機能は十分でないことがとらえられた。

しかし、「個人的居場所」をその性質とレベルからみると、「一人になりたい」「好きなことに熱中したい」という低レベルの隔離・逃避要求には対応しているが、「大人の目を避けたい」「嫌な思いやストレスを解消したい」という、より高次元の隔離・逃避要求には十分対応できておらず、家庭以外の居場所が必要であるといえよう。

3) 学校における子どもの居場所

子どもは学校において、クラス以外のクラブや委員会等に多く所属し、クラスやクラブで何らかの役割分担をしているものが一定程度存在しているなど、「社会的居場所」を形成するための要素も持っているものが多いことがとらえられた。

学校において、「安心感」や「安定感」を感じているものは非常に少なく、学校は「個人的居場所」にはなっていないことがとらえられたが、「快楽感」を感じているものは比較的多く「社会的居場所」は形成されていると考えられる。居心地の面からみると、拘束のない自由な時間に居心地の良さを感じているものが多いが、「特に居心地が良いと感じるときはない」ものが3割に上るなど、学校に居場所を形成できていないものかなりあることが明らかになった。

「個人的居場所」をその性質とレベル別にみると、どの面においても居場所もっているものは、家庭の場合より少なく、高次元の隔離・逃避要求をする場合の居場所はさらに少なくなっている。しかし、「社会的居場所」もっているものは多く、学校は「社会的居場所」の拠点となっていると考えられる。

4) 地域における子どもの居場所

本研究の調査対象の子どもは、地域に密着した生活をしており、自然環境にも恵まれた居住環境にある。

居住地域に、「安心感」や「安定感」を感じているものは、学校の場合よりもかなり多く、家庭における「個人的居場所」の欠落部分を補完していると考えられる。居心地の面からみても、友人や仲間がいる場所に居心地の良さを感じており、「特に居心地が良いときはない」と感じているものも学校より少ないということからも裏付けられる。

「個人的居場所」をその性質とレベル別にみると、すべての面について居場所もっているもの

は家庭の場合より少なくなっているが、先に述べた心理状態からも家庭の機能を補完していると考えられる。また、「社会的居場所」を持っているものは多く、学校とともに家庭の機能の欠落部分を補完していると考えられる。

以上のように、子どもは、家庭を中心に「個人的居場所」を形成しているが、高次元の隔離・逃避要求に対応しきれておらず、「社会的居場所」としての機能も十分でない。学校には居心地の悪さを感じているものも多いが、「社会的居場所」の機能は果たしている。地域には、安心感を感じており、居心地の悪さもあまり感じていない。したがって、地域は家庭における「個人的居場所」の高次元の隔離・逃避要求を補完していると考えられる。また、家庭で十分な機能を発揮していない「社会的居場所」については、学校と地域がこれを補完していると考えられよう。

注

- 1) 藤田雅義 他：「子どもの生活様態と居場所の関係－フリースクールにおける環境行動研究③」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2001
- 2) 森保洋之、山田直美：「子どもを中心にみた住空間の計画に関する研究 その2 家族のコンタクトと子どもの居場所の関係について」、日本建築学会学術講演梗概集、2002
- 3) 定行まり子、松木要詩子：「中高生の生活と居場所に関する研究・その1」「中高生の生活と居場所に関する研究・その2」、日本建築学会学術講演梗概集、2000
- 4) 古賀紀江 他：「高校生の住まいの意味に関する考察」、日本建築学会学術講演梗概集、2001
- 5) 小澤紀美子：「中野区子どもの居場所調査報告書」、中野区地域センター、1994
- 6) 舟橋圀男 他：「日常生活における「佐倉ヤングプラザ」「ゆう杉並」の使い方の分析－中高生の居場所づくりの試みに関する研究 その③」、日本建築学会学術講演梗概集、2001
- 7) 藤竹暁：「現代のエスプリ別冊生活文化シリーズ3 現代人の居場所」、至文堂、2000
- 8) 田中治彦：「子ども・若者の居場所の構想」、学陽書房、2001